

はく めい ごく
白冥の獄2 上
シャジュディ
霊域の秘密

ジン・ヘイル

訳／原島文世

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

LORD OF THE WHITE HELL BOOK TWO

by

GINN HALE

Copyright ©2010 by Ginn Hale

Japanese translation rights arranged with

Blind Eye Books

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

Japanese edition ©2014 by Chuokoron-Shinsha, Inc.

口絵・挿画 笹原亜美

目 次

第一章	11
第二章	30
第三章	47
第四章	60
第五章	75
第六章	82
第七章	105
第八章	120
第九章	138
第十章	156
第十一章	175
第十二章	189
第十三章	197

登場人物紹介

キラーム・
キルニザキ

ハビエル・
トルナサール

リオッサ・
アレビーリョ

フェデレス・
ケマノール

ネストル・
グルニート





ムスニ・
リド＝アシラ

アリザデ・
リフ＝ムス

ラーフィ・
キル＝ザキ

マジュデイ・
キル＝ザキ

ダーウド・
キル＝ザキ

エレザール・
グルニート

献辞

この本を馬のトリストンに捧げます。きっとほかの人にも靈感を与えるでしょう。

日本での出版に際して

この本を出そうと熱心に努力してくださった日本の出版社のみなさんに、ぜひお礼を申し上げたいと思います。大変な仕事なのに、多くの場合報われないように思われることは承知していますが、わたし以外のたくさんの方々の配慮や尽力、クリエイティブな精神がなければ、この物語が読者のもとに届くことはなかったでしょうし、そのことに心から感謝しています。原稿を丹念に確認してくださった編集さんやイラストレーターさん、校正や印刷にたずさわる方々、本当にありがとうございます。

ですが、誰よりも訳者の原島文世さんに感謝しなければなりません。英語の原文と二種類の異世界言語を訳すという作業にねばり強く取り組んでくれたばかりか、しばしば質問に対するわたしの突飛な回答まで訳すはめになったのですから。この本のおかげでさんざん苦勞させられたというのに、どんなときでも惜しみなく力をつくしてくれました！

第一部までのあらすじ

異教徒ハルディーム族として初めてカデレオンの王立サグラダ学院への入学が許された天才少年キラーム。風習の違いや、差別を感じつつも勉学にはげむ日々を送る。寮で同室のハビエルは、爵位と武芸により敬意を集める存在ながら、地獄への扉《白冥^{はくめい}の獄^{ごく}》を体内に宿し、その力で人を害することもできると恐れられている。彼の傲慢とも見える態度に最初は反発するキラームだが、その内面の繊細さにも気づかされていく。親友もでき、学院生活を楽しみ始めた頃、ハルディーム族の僧侶（バヒーム）である叔父たちが、ハビエルにかけられた呪いを察知し、キラームに学院を離れるよう求めてきて……。

白^{はく}冥^{めい}の獄^{ごく}
2 上

靈^{シャ}域^{ジュ}の秘^ミ密^ミ

第一章

キラーは赤くなった目でサグラダ学院へ続く道沿いの畑をながめた。収穫の名残は乾いた向日葵の茎と崩れた畝だけだ。その風景はいまの気持ちにおとらず、ずさんで見えた。前の晩、豪華な寝台で寝つけなかったが、暗く窮屈なトルナサル家の馬車の中でも休めなかった。強い酒を飲まされ、知らぬ街路を何時間もさまよってたくたになったのに、目が冴えてしまっていた。いまでも心がざわついて眠れない。

林檎の木立で、青い懸巢があざやかな羽をひらめかした。赤く色づいた葉を散らし、荷物を積んでぎしぎしときしむ馬車の上を飛びすぎていく。キラーはみぶるいした。毒でもそそぎこまれたかのよう

に腕の傷がうずく。一週間前なら、こんな寒い秋の朝にきれいな鳥を見るのは悪くないと思っていただろう。優雅に舞う姿に感心し、一定の速度で進む一台の馬車にぴたりとついてくることなど気にもとめなかったに違いない。

いまでは懸巢の追跡に悪意があるとわかっている。この群れは影の呪いの先触れで、呪いを操る男の密偵としてこちらを尾行しているのだ。

向かいの席にだらりと腰かけたフェデレス・ケマノールがうめき声をあげてぴくりと動いた。のんびりとうたた寝していたところを、上空で旋回している懸巢に邪魔されたのだ。はっと息をつまらせ、腕で隠れていた頭をごろりと出す。キラーはフェデ



レスに目をやったが、不安げな表情を浮かべた鋭い顔立ちは、ハビエルと見間違えるほどだった。

苦痛にも似たせつなさが全身をつらぬいた。キラームは疲れた目をこすった。ハビエルのことを考える余裕はない。ふたりの関係は終わった。ゆうべお互いの手で壊してしまったのだ。

今朝ハビエルはろくに目も合わせず、朝食の席で挨拶したときにも反応を示さなかった。食事を中断して立ちあがり、フェデレスにだけ声をかけると、サグラダ学院へ出発してしまった。一時間もたたないうちに、トルナサール邸の陰気な使用人たちがこのかびくさい馬車にキラームとフェデレスを手際よく押しこんだ。まるで荷物にすぎないかのように。フェデレスがまどろんでいるあいだ、キラームは家紋が描かれたハビエルの旅行鞆りようかばんや革箱からわざと目をそらし、ほかのことに頭を向けようとした。

だが、ハビエルとフェデレスの外見がよく似ているせいで、忘れたことがそっくり浮かんできてし

まう。乱痴気騒らんちきぎの悪臭が革の座席から立ちのぼってくるようだった。いちばん忘れたいと願うつらい瞬間ほど、細部までくつきりと記憶に焼きつけられてしまふのはなぜだろう？

フェデレスの脚が動き、ふくらはぎに触れた。その感触に不思議となくさめられた。

ハビエルもフェデレスも手足が長く色白で、漆黒の髪と整った目鼻立ちをしている。ちらちらする荷物の影やキラーム自身の疲労のせいで、今朝のフェデレスは顎あごの輪郭がきつく、唇くちびるが傲慢に弧を描いているように見えた。新品の分厚いビロードの外套がいとうがフェデレスの細身をハビエルのたくましくひきしまった体つきに見せかけている。

ふたりは兄弟か、下手をすれば双子でも通るだろう。ハビエルの父とフェデレスの母の恥すべき関係がひそかに取り沙汰されるのも無理はない。だが、フェデレスを従兄の身代わりにするのは間違っているとわかっていたので、キラームは脚をずらした。

フェデレスがいきなりがばつと身を起こした。意識が戻るとハビエルと似ている部分のほとんどが消え失せた。黒い瞳が大きくなり、口もとがひきつれて洪面^{じゅうめん}ともになや笑いともつかない表情になる。長い指で手をつかまれたとき、握る力の強さに気づかずにはいられなかった。ゆうべのハビエルにも負けていない。

「あいつら、殺そうとしてるんだ、キリ」フェデレスはささやいた。「あの鳥ども——」馬車の窓を懸巢^{けんそう}がかすめていったので、ぴたりと口をつぐむ。顔から完全に血の気が引き、唇まで真つ白になった。「おまえに怪我^{けがい}なんかさせないよ、フェデレス」キラームはうけあった。フェデレスはかぶりをふり、激しく体をふるわせた。荒々しく狂暴な笑みに唇がゆがんだが、みひらいた目は依然としておびえきっている。

「こっちを見ろよ、フェデレス」キラームは蓮^{れん}のメダルを襟^{えり}もとからひっぱりだして持ちあげた。閉め

きつた薄暗い馬車の中でさえ、メダルはみずから発光しているかのように輝いた。せめて恐怖から気をそらす役に立ってくればいいのだが。

フェデレスは鴉^{カラス}さながらにうつとりとメダルを見つめた。

「うちの叔父の相棒はハルディームの僧侶^{べいしゆ}なんだ。これはその人からもらった。ほら、ハルディーム族にとつて、蓮は強い守護のしるしなんだよ」

アリザデによれば、メダルはそれ以上のものだ。のぞき穴として機能し、影の呪いの内なる働きを見抜く機会をもたすばかりか、呪いの黒幕を特定する力さえあるかもしれないという。キラームはメダルを掲^かげながら、あの懸巢^{けんそう}を操る黒魔法の手がかりがわずかでもつかめることを願った。

馬車が道のごつごつした石にぶつかってはずみ、メダルがゆれた。みがきこまれた表面が光を放つ。すると、なんの前触れもなく懸巢^{けんそう}の群れが追跡を中止した。理由ははっきりとわからないが、耳ざわり

な鳴き声をあげながら、サグラダ学院を囲む深い森の奥へと逃げていく。

その様子を見送ったフェデレスの表情がぱつと明るくなった。キラームに両腕を投げかけ、息がつまるほど強く抱きしめてくる。それから体を離すと、窓に顔を押しつけ、懸巢が逃げていった方角をにらみつけた。

「近づくな、近づくな、近づくな」と、聖句を唱えるようにつぶやく。そして座席にふたたび背をもたせかけた。

「いい厄介払いだ」キラームも鳥の群れが視界から消えてほっとした。いまなら少し眠れるのではないだろうか。だが、まぶたを閉じると、身をくねらせる娼婦やハビエルの傲慢なまなざしがよみがえり、苦々しい気分に苛まれた。

また目をひらいて体を起こす。

向かいではフェデレスがほがらかな調子で鼻歌を歌っていた。ときどき脚を動かしては、完璧に拍子

を合わせて爪先で馬車の床を打つ。しばらくして、キラームの膝を軽く叩いてきた。「ダンスだよ、キリ」と告げる。

キラームはにつこりした。どういうわけか、サグラダ学院の中でフェデレスだけが、ハルディーム風の愛称を知っているらしい。

「クアレッサを踊ろう」フェデレスは優雅に床の上で足先を動かし続けた。「左足を出して戻して、出して蹴る」実際にやってみせ、期待をこめてキラームの足を見る。

なにをしてほしいか気づいたものの、一瞬抵抗をおぼえた。昨夜の苦い思いがまとわりついてたからだ。だが、ハビエルとのあいだにどんな問題があるにしろ、フェデレスを責めるのはお門違いだ。そこで動作をまねると、フェデレスは満足そうに顔を輝かせた。

「今度は右足」とダンスのステップをしてみせ、キラームが同じように動かす。

フェデレスは声をたてて笑いながらクレッサの足の運びを通して教えてくれた。ゆうべはひどく傷つき、嫌悪感でいっぱいだったので、二度とカデレオン式のものがすてきだと思うことなどないだろうと考えていた。しかし、今朝になって胸躍る感覚が戻ってきたようだ。

また、フェデレスは一緒にいると楽しかった。たとえこんな状態でも、偏見なしにキラームを受け入れてくれるからだ。いまはなによりもそのことがうれしかった。「もう一度、もう一度！」とフェデレスが歓声をあげ、キラームは座ったまま言われた通りに足さばきや蹴りを繰り返した。

革の旅行鞆がきしみ、ふたりの体重で馬車はずむ。一度ならずステップを間違えてお互いの膝やくるぶしがぶつかりあったが、フェデレスは笑い飛ばした。キラームはすぐにうまくなった。四回目にはほぼ完璧に足の動きがそろっていた。フェデレスはお気に入りの馬たちの名前を歌った。キラームの黒

い去勢馬フィラージの名を何度も口にしてから、ハビエルの白い駿馬ルナルーズの名をうれしげに呼んだ。

道を取り巻く鬱蒼とした森の奥に、本当にちらりとだが、白いものがよぎったような気がした。反射的に目を向けたものの、暗い森に白樺の木が生えているだけだとわかつてがっかりする。

馬車がきしみながらかどをまがると、サグラダ学院の要塞めいた威容が迫ってきた。敷地にそびえたつ巨大な石造りの本館は三階建てで、さらに高く物見の塔が突き出している。キラームはとくに感慨もなく水漆喰を塗った広い厩と闘技館をながめたが、礼拝堂の空色の屋根と黄金の尖塔が目に入ると顔をしかめた。

アリザデとラーフィは影の呪いを操っている者を丘の男^{／＼}としか言わなかったが、王家の主教の指令を受け、喜んで殺人や拷問をたくらむ者がサグラダ学院にいるとすれば、どう考えてもアバラン神

父だろう。

そう思うと、礼拝堂の敷地内にある節くれだった樅^{カシ}や果樹の中に、いったい何羽の懸巢^{カサネ}がひそんでいるのかと不安になった。高い梨^{ナシ}の木の枝に二羽止まっている。がたごとと通りすぎる馬車から見つめたとき、たしかに品定めするような視線が返ってきた。

ふいに、青い懸巢の群れがナキシユの姉妹^{シイモ}たちを情け容赦^{ようしや}なく襲撃した光景がよみがえった。あの連中はみずからの死さえ顧^{かへり}みることなく猛攻を続けたのだ。

礼拝堂から目をそらすと、厩の前に集まった学生の中に知っている顔がちらほら見えた。漠然と安全だという感覚が戻ってくる。フェデレスが座席によりかかって目を閉じた。

馬車が止まるとキラームもフェデレスも飛び出し、待っていたグルニート兄弟に挨拶した。ネストルは満面の笑顔でふたりを迎え、エレザールは大きな体で友人同士の会話に立ち入ってくる浮かれた学生た

ちを遠ざけた。

ヘニモの明るい赤毛がエレザールの脇を通りすぎた。無関心で冷淡な視線をキラームと交^かわしたものの、なにも言わないまま、フェデレスのそばにぶらぶらと近づく。

キラームは大勢のカデレオン人学生や馬丁^{ばてい}、召使いが群がる中を搜した。癖のない褐色^{かつしよく}の髪、そばかすの散った白い肌の人々がまわりを囲んでいる。背が低くがっしりした馬丁からエレザール・グルニートのたくましい巨体まで、体格はさまざまだったが、ハルディームらしいキラームのほっそりした体や淡い色の瞳、浅黒い肌、ふわふわの金髪とは大違いだ。ハビエルは人混みの中におらず、キラームは不安になった。姿を現したらどうすればいいのだろう。

「ぼくらが荒くれ仲間の最後かな？」周囲では誰も騒々^{そうぞう}しく挨拶を交わしており、聞いてもらうためには声をはりあげなければならなかった。

「ほかの連中はおおかた寮に行つたよ」ネストルが答え、続いて大あくびをした。まぶしい朝の光のせいかもしれないが、キラームにおとらず疲れているようだ。ふつくらした桃色の頬がこけ、小さな金縁眼鏡も目の下の隈を隠しきれていない。ネストルも昨夜恋愛問題に直面することになったのだらう、と思つたが、みんなの前でたずねる気にはなれなかつた。

灰色の仕着せ姿の召使いたちが荷物をかかえてキラームとフェデレスの横を通つていった。馬丁が馬と馬車を引き受ける。

鞭のように細いエリオの双子のひとりが別の馬車からおりた。出迎えた友人たちがもう片方についてひそひそと問いかける。キラームはなおもハビエルを捜してそのむこうをのぞきこんだ。

「ハビエルは礼拝堂だ」エレザールが教えてくれた。「どうやったら朝も昼も礼拝に耐えられるのか、俺には理解できないが」

「そうかなと思ひました」キラームは答えた。それ以上なにを言えぱいいのか、いきなりわからなくなる。ゆうべあれほど荒くれどもの放蕩ぶりをまのあたりにしたのだ。いまではエレザールの鷹めいた視線をまっすぐに見られなかつた。

「フェデレスを医務室に連れていかないと」ヘニモが脇を通り抜け、子どもでも扱うようにフェデレスの手を引いた。フェデレスはにつこりしたが、その手から逃れようとしているのがわかつた。

「ぼくと一緒にいればいいですよ」キラームは申し出た。ヘニモの細面に腹立たしげな表情がひらめいた。

「ドナミリーヨ先生のところで治療を受けさせる必要があるんだ。そのあとなら喜んで引き渡さす」視線は合わせなかつたが、キラームの頬の小さな傷痕にこっそり目を走らせる。「ハビエルが反対しなればな」

「どうして反対するんです？」と応じたものの、自

分への嫌がらせのためだけに拒むかもしれないという考えがよぎった。怒ったときのハビエルは残酷にふるまうことがあるし、どうやらいまは相当頭にきているらしい。それでも、フェデレスを人質のように使うほど器が小さくはないだろうが。

昨夜の件があつてさえ悪く思えないほどハビエルに執着しゅうちやくしている自分に一瞬苛立ちいらだを感じる。いっそ嫌いになれば、それが無理なら、せめてすばつと忘れられればずっと楽だろうに。

「おまえらふたりがそこに突つ立ってハビエルの行動の理由を憶測しているかぎり、フェデレスはいつまでも治療を受けられないぞ」エレザールが口を出した。

ヘニモはエレザールをにらみつけてから、フェデレスに注意を戻した。

「こい、フェデレス」ヘニモは足をもつれさせたり踏ん張ふったりして抵抗するフェデレスをひきずっていった。こちらにはどうしようもなかったし、呪い

を破る方法が見つかるまではフェデレスにとってドナミリーヨ教授の治療を受けることが最善とわかつている。それでも、あんなに治療をこわがらなければいいのに、と思わずにはいられなかった。

「僕たちも厩の前を空けたほうがいいね」また一台馬車が近づいてきたので、ネストルが言った。

三人は本館へ続くまがりくねった小道を歩き出した。芝生を横切っていくと、金色に枯れた秋の草が靴の下でがさがさと鳴り、鉢植えの薔薇ばらに黒っぽい実が点々とついているのが目についた。林檎の木の枝の多くが裸になっていて、地面に黄色い葉が散らばっている。陽射しが明るいのに空気は冷たく、本館の濃い陰もひんやりとしていた。

「夏があつという間に行つちやつたみたいだ」とキラームは感想を述べた。

「そうだね、でもいまは熟した林檎が山ほどある」茶色い目の下に隈ができていたものの、ネストルがうれしそうに笑うと顔全体が輝いた。「秋の大会も

終わつたことだし、もう起きてるあいだじゅう戦鬪の稽古をしなくてもすむよ、きみも僕も」

それはありがたい、とキラームは結論を出した。

前の日の夜のごたごたを考えれば、ネストルは驚くほど陽気だった。運悪くグルニート家にひとりで到着したりオッサの件は、うまく解決したに違いない。

「それで」キラームはネストルを見やった。「ぼくがきみのお母さんの舞踏会から失礼したあと、どうなったか教えてくれないのか？」

「この馬鹿が、婚約するはめになりやがつた」エレザールがうんざりした口調で答えた。

この台詞に対し、ネストルはいとも誇らしげに微笑した。「ほかにどうしようもなかったからね。リオッサの評判を落とすわけにはいかないし。リオッサ自身に結果を引き受ける気がなかったわけじゃないさ。リオッサなら——」

「あの娘は文字通りおまえをひっかつたんだ」エレ

ザールがさえぎつた。

ネストルはそちらをにらみつけた。「兄さんはその場にいなかったんだから、なにがあつたのかぜんぜん知らないだろ」

ネストルが兄に言葉を返すところを見たのはじめてではないか、とキラームは思った。エレザールのほうでは、弟に独立心が芽生えたことをうれしがつてはいない様子だった。

「知る必要があるとしたら、おまえがあほうだということだけだ。まんまとだまされてな」芝生のむこうに人影を認めて、エレザールは急に言葉を切つた。その視線を追うと、礼拝堂から厩へ足早に歩いていくハビエルの広い背中と長い脚が視界に入った。

「俺はハビエルの様子を見てくる」エレザールが宣言した。「一緒にくるか？」

「あとにします」この返事がさりげなく聞こえるといいが、とキラームは願つた。

「あとで」ネストルも同意した。

こいつらのやることはわからない、と言いたげに肩かたをすくめたエレザールは、急ぎ足で友人を追いかけた。

「ああよかった」声の届く範囲から兄がいなくなつたとたん、ネストルが言った。「朝からずっと言われてたんだ」

「まあ、たしかにきみが婚約したっていうのは予想外だからね。リオッサと知り合ってからたつた一週間じゃないか」

「だけどキラーム、実際そうするしかなかったんだよ。それに、エレザールが言ったようなことじゃないんだ。リオッサは別に、騒ぎを起こそうとしてひとりできたわけじゃない。建物の外で二時間近くお姉さんがくるのを待ってたんだ。そのあと、家に帰れるように馬車を呼んでもらおうとして中に入っただけさ。でも、従僕が招待状を見て舞踏室に連れてきちゃったんだ」

そう聞いてキラームは眉まゆをひそめた。カデレオン

人の良家の令嬢が何時間もひとりではうっておかれることなどありえないはずだ。「じゃあ、なんでお姉さんはリオッサを待たせておいたんだ？」

ネストルは声を低めた。「どうやら馬車の御者とできて、ゆうべ駆け落ちを執行したらしいよ。リオッサを祝賀会に連れていくって伝えてあったから、旦那のほうは家にいなくても気にしなかったみたいだ。リオッサには忘れ物をしたって言って、外に置きっぱなしにしたまま家の馬車で逃げたんだったさ」

「ひどいお姉さんだな」

「うん。なにが起こつたのか、誰もすぐにはわからなかったしね。最初うちの母さんは、リオッサが僕をつかまえられるようにわざとお姉さんが置き去りにしていったんだと思ってた」ネストルはあきれた顔をした。「リオッサがそんなことをする必要なんかないのにさ。美人だしおもしろいし頭がいいし」

「それにキスもうまいらしいし」キラームはつけく

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。